

## 会話能力とその育成プログラムに関する考察

小室 俊明

### Conversational Competence and Language Teaching

KOMURO Toshiaki

This paper starts with the assumption that there are multiple causes for a learner's inability to speak in English. If we could identify all the causes, we would be able to develop a test aimed at pinpointing the areas of weakness that the particular learner has. The causes, in other words, are abilities which the learner lacks when he or she talks in English. "Conversational Competence" is the phrase which the writer uses for such abilities. Instead of "speaking competence," which goes only one way, conversational competence includes the combination of understanding the speech and responding to it, which is not exactly the same thing. Part of this competence is "conversational stamina," which is necessary when processing, within a very limited time, speech that the learner only partly understands. It also discusses the ability to contribute to the conversation (e.g., making appropriate comments) which is not a problem limited to English but is also evident when the talk is in Japanese. It concludes with a summary and some suggestions for improving the situation.

## 序 論

「英語を話せるようになる」というのは日本の英語教育に長年求められていて、しかしながら応えることができてこなかった課題である。「中学から大学まで8年以上（英語専攻ならば10年）も英語を勉強したのに英語がまったく話せない」という不満には根強いものがある。これに対して高校へのALTの導入やオーラル・コミュニケーションの重視など多くの改革がなされたが、その効果は決して十分とは言えない。それどころかここ数年、年々英語の基礎力は低下を続け事態は悪化しているとさえ言える。

英語教育の改善については長年にわたって多くの研究、提言がなされてきたが、今のところ状況はあまり変わっていない。そこで本論では今までの研究ではあまり触れられてこなかった観点をいくつか検討しながら、英語が話せるようになるために必要な能力とそのトレーニング・プログラムの可能性を考察したい。

### 1. 個別トレーニング・プログラムの必要性

まず学習者が「英語を話せない」ことについて、次のような仮説を考えてみた。

「学習者が英語を話せないのには複数の要因があり、個人により特定の要因または特定の要因の組み合わせが原因となって話せない」

この仮説を考えたきっかけは20年来の教暦の中で観察した英語を話せない学生の様子と、テレビのインタビュー番組の中のスポーツ選手のトレーニング・プログラムの作成についてのコーチの談話が結びついたことだった。その談話の中でコーチは各選手の力を伸ばすプログラムを作成する場合、その選手の特性に合わせる必要があると述べていた。つまり背筋力の弱い選手はそれを強くするトレーニングが必要であり、それと同じトレーニングを既に背筋力の強い選手に課しても同じ効果は得られないということだ。後述するように英語の学習者にも得て不得手が色々あり、同様の配慮が必要ではないかと考えたわけである。そうすると学習者が英語を話せるようにするには、多人数クラスで

一斉に同じことをするのではなく、次のような流れが必要であると考えられる。

個別の学習者の英語を話せない要因（その組み合わせ）を特定する



その要因を克服するためのピンポイントのトレーニングを課す

この流れは上記のスポーツ選手に課すトレーニング・プログラムの作成の場合と同じである。また医療現場の、「病気の診察→治療計画」の作成と同じ流れであり、非常に単純なものであり、容易に実現可能であるように見える。しかしこれは一筋縄ではいかないものである。第一にその出発点である英語を話せない要因（裏を返せば「英語を話す上で不足している能力」）が十分に把握されていない。どういう要因が、どのくらいの数があるのかということは研究者間にコンセンサスがなく、まだよくわかっていない。いわんやその組み合わせなどについての情報はほとんどない。後述するが、筆者の見解では今までの研究では取り上げられていない観点のものの中に大切なものがあると思われる。

第二にそうした要因の全体像が明らかになったならば、個別の学習者がそのどの部分に不足があるかを適切に診断するテストを開発する必要がある。これは新しい観点の要因や能力がまだ現在の段階では固まっていないので、まだ入り口に立ったばかりだと言える。

第三には、弱点を補正するトレーニング・プログラムを考えるわけであるが、その点も第一、第二のポイントが明らかになっていない現状では本格的に着手するのは難しい。そういう意味では不足している情報が多段階に渡り、また各段階でもわからないことが多く完成図を作り上げるのは容易なことではない。それには多大な労力とかなり長期間の研究が要求されることになる。ただしすべての点が明らかにされるまで待っていては「学習者が英語を話せるようにする指導」の開発は当分の間何も先に進まないことになってしまう。そこでわかったところから同時並行的に3つの段階の不足する情報を埋めていき早い

段階から指導にフィードバックできるような道筋を考えている。

## 2. 会話能力

本論ではそうした研究の第一歩として、英会話を阻む要因を解消するのに  
どういう能力が必要かを中心に論じて行きたい。なおこの研究はあくまでも実  
践的に学習者に会話能力を付けさせることを第一義とするので、隙のない理論  
的体系は次の段階に詰めればよいと考えている。したがって理論的根拠がまだ  
はっきりしていないようなものでも学習者の観察を通じて、説明力を持つと思  
われるものについては含めるものとする。

### 2.1 スピーキング 能力と会話能力

まず「英語を話す」ということについて考えてみたい。通常「話す」ある  
いは「スピーキング」という場合は言語を4技能に分けた内の「音声モード」  
で「発信する」ものを指す。しかし「英語を話せるようになりたい」というと  
きには一方的な発信を考えているのではないことは明らかで、実際には「英語  
で誰かとコミュニケーションをしたい」ことを意味している。これはつまり相  
手との言語メッセージのやり取りを行うことである。そうすると当然「相手の  
メッセージの理解」が間に挟まれ、それに基づいてまた発言することになる。  
ところがスピーキング・プロセスや能力の研究を見てもこの点はほとんど触れ  
られることがなく、発信する場合のみが分離して扱われている。

(注:ただしアメリカ外国語教育協会 (ACTFL) の口語能力検定試験をもと  
にして ACTFL と(株)アルクが日本人用に共同開発した SST (Standard  
Speaking Test) においては comprehension of interviewer questions という  
評価項目があり、筆者の主張と近いものがある。ただそれでもそれと次の発話  
の有機的な関係までは触れられていない)

したがってこの「やり取り」を含んだものとして「スピーキング」と区別  
する用語を使いたいと思う。本来は「コミュニケーション」という語を使用し  
て、その能力を「コミュニケーション能力」としたいところであるが、既に別

の概念として「文法的に文を組み立てるだけでなくコミュニケーション上の状況や文脈に合った適切な文を使う能力」(Campbell and Wales 1970, Hymes 1972 他) (これも上に述べた意味では一方向的である) として使われているので避けたいと思う。そこで原点に戻って双方向を含んで話す能力を「会話能力」(conversational competence) としたい。「会話能力」の中では「スピーキング能力」は「リスニング能力」(及び双方向コミュニケーションをするのに必要な他の能力があればそれも含めて) とセットになっている。このセットであることによって単独のプロセスとは違った能力が要求されることになる。

もちろん会話能力の中には、これまでのスピーキング能力やリスニング能力あるいはコミュニケーション能力で取り上げられていた下位項目のものはほとんど含まれることになる。例えば communicative competence の中で取り上げられる「文法的な文を作る力」(grammatical competence)、「社会的な文脈上適切な文を作る力」(sociolinguistic competence) などそのまま会話能力の中でも重要な要素である。

## 2.2 会話のスタミナ

それでは会話のプロセスを見ながら少し具体的に考えてみよう。便宜上「自分」と「相手」の2者による会話を想定して進めていきたい。まず会話の冒頭の部分で「自分始動」の場合と「相手始動」の場合に分かれることになる。ただしこの違いはあまり重要ではない。どちらが始動するかによって最初のトピックは決まってしまうが、それが固定的な会話の主導権につながることはあまりない。自分が始動した場合でも相手から発言が帰ってきた時点で、相手始動の場合とほとんど同じプロセスになる。

ここでは「相手始動」を例に考えていきたい。相手のメッセージを理解するには相手の発話の英語の音を聞き取り、語彙や文法、イントネーションなどの音調、を分析することになる。その際にはそれまでの共通知識や場の状況、顔の表情といったノンバーバルなものも含めて総合的に情報を集約することになる。「英語を話せるようになりたい」学習者は英語があまり得意でないところ

ろから出発するわけだから上記のいくつかの点について十分な情報が得られない可能性が高い。

ここで相手のメッセージがよくわからないという不安と戦いながらも、集められる限りの情報を集めて、最善の推測（「多分こう言ったのではないか」という暫定的な best guess）を一瞬のうちに出して、それにもとづいて自分のメッセージを早急に作成して、返さなければ communication breakdown が起こってしまうことになる。作成できた場合でも相手の反応（表情や次の発言など）をモニターして、推測を修正したり、補完したりしなければならない。もちろんある程度相手の協力を得られることはあるだろうが、こうした作業には大変な集中力のスタミナが要求されることになる。これを筆者は「会話のスタミナ」(conversational stamina)と呼んでいる。そして筆者はこのスタミナの不足が「英語を話せない」ことの重要な要因であると考えている。現行の授業や学習方法を見たときにこのスタミナを養成する側面が欠けているのではないと思われる。それについて少し考えてみたい。

#### a. 不安に耐え続け best guess をする

まず日本の学習者の多くにはこの best guess をする習慣がない。通常の英語学習では予習や授業の解説によって英文の意味を（表層的ではあっても）理解してから先へ進む習慣になっている。しかし実際のコミュニケーションではわからないことだらけでも（つまり理解がいかに不十分であっても）best guess をして会話を先へ進めなければならない。これに慣れていないと学習者は激しく疲労し、コミュニケーションの継続は困難になる。この「わからないことに挑戦し続ける忍耐」（つまり精神的なスタミナ）が会話には必要である。会話はその連続で成り立っているのであるから。

#### b. 制限時間の中で処理をし続ける

不利な条件の中で best guess をするのは認知的にかなりの負担を強いるものである。それをさらに（コミュニケーション上の）制限時間内に行わなければならない。相手に返事を戻すまでには、こちらのメッセージを作る時間も加わるのだから、理解にあまり時間をかけていては会話が成立しなくなってしまう

う。したがって実際のコミュニケーションでは、相手のメッセージの理解は短い制限時間の中で、しかもほとんど休みなく連続して行われる。この消耗に耐え続けるスタミナも是非必要である。

### c. スタミナを左右する要因

このスタミナを左右する要因は様々である。第一には「英語の習得度」があげられる。音の聞き取り、語彙、文法理解などが高レベルにあればそれだけ情報処理が楽だから、スタミナは温存できる。レベルが低いほどスタミナの消耗は激しくなり、あまり少なくなると回復不能地点に達してしまう。

これ以外にも様々な要因が考えられる。これを詰めていき、スタミナの厳密な全体像を作り上げるのにまだまだ時間がかかると思われるがいくつか関連するであろうものをあげておこう。

#### (1) トピックに対する興味、関心

トピックに対して強い興味や関心があれば会話を進めることそのものが楽しくなり、より長い間スタミナが持つのはいうまでもない。また予備知識が多ければそれだけ関心を持つ点を見つけやすいのでこれも要因の一つであろう。

#### (2) 状況や相手による動機付け

そのコミュニケーションの成否が命に関わるものであったり、仕事や人間関係上重要であったりすれば、当然普段よりスタミナが持続することが予想される。また相手に話すこと自体に大きな動機付けがある場合も同様であろう。自分が尊敬していたり、あこがれていたり、恋していたり、友情を感じていたりといった、相手と話すことに大きな意義を見出すような状況ではコミュニケーションのスタミナは持続する。逆に、話す必然性がまったくない、相手と話したくないと考えているような場合、スタミナの消耗は激しいことになる。こういう状況は人為的設定の多い授業において起こりがちなので注意が必要である。

#### (3) 相手との相性

人間には母語であっても話しやすい相手と話しにくい相手がいるもので

ある。これは多分に「相手と自分の呼吸のリズム」や「間」の問題が絡むと思われる。あるいは何か生理的なものがあるのかもしれない。いずれにせよ他の人と話しているのを聞いておもしろい人だと思ったのに、自分が話してみるとどうにも話しづらいことは確かにある。また逆に非常に話しやすく感じて、会話が進むという場合もある。こうした相性はスタミナに影響を与えることが考えられる。

#### (4) 相手の特性

自分が相手のメッセージを理解できなかつたり、自分のメッセージを相手が理解できなかつたりした場合、相手が協力的でなかった場合はコミュニケーションを持続するのが困難になる。相手がいかに辛抱強いのか、自分の困っている部分に対する理解が深く救いの手を差し伸べてくれるかなどはこちらのスタミナが持続するがどうか大きく影響する。

#### (5) 自分の心身の調子

本来スタミナな自分の集中力の持続なわけであるから、疲労や体調の悪さ、あるいは何か集中を妨げるような心理的な要因があれば、当然 conversational stamina にもその影響が現れる。

#### (6) 自分の性格

スタミナには当然性格が反映されることになる。基本的にものごとに粘り強くがんばる人と、飽きっぽくすぐやる気を失う人とは出発点から違ってくることは自明の理だろう。

なお上記の a, b のスタミナはともにある程度の訓練によって持続力を伸ばすことは可能であると思われる。例えば何かの事件についての1分間くらいのコメントを20種類くらい録音しておいて、最初のコメントを聞いて15秒以内に要約を発表させて（あるいは事前に渡した質問に対する答えでもよい）、すぐ次のコメントを流すというのを休みなく20回（あるいは最も効果の出る回数）続けるような形にすれば、時間制限の中で情報を汲み取ってすぐ発言に結びつけることに慣れ、スタミナはある程度身につくものと考えられる。またその際に英語のレベルを上げていけば、はっきりわからないものについて発言する不



安に対する耐性もできるのではないだろうか。筆者の授業では口頭発表ではないが、学習者が簡単には理解できない英語（物語）を10分程度聞かせて、要約を書かせるようにしているが、最初は途中で投げ出しているような学生でも年度末にはかなり集中できるようになっている。このあたりの工夫はまだまだ研究の余地がある。

### 3. 英語力以外の要因

「英語を話せるようにする」ことを考えるときに、英語力以外の要因のことを考えるのは一見ずれているようであるが、筆者はこれが重要だと考えている。斉藤（2001）では「子どもに伝えたい力」として3つの力をあげているが、その中でも conversational competence に重要だと思われる「コメント力」について取り上げたい。斉藤はコメント力のセクションで3つの力をあげている。

「要約力」、「質問力」「コメント力」である。

「要約力」については「相手の言っていることを論理的に整理し、価値観や感情を読み取って相手の言おうとしていることの本質を読み取ること」だとしている。英語やノンバーバルなものを含めて best guess をするときにもこうした能力が高ければ、語学力の不足を補うことも可能かもしれない。同じ語学力なら確実にこの力があるほうがより効果的なコミュニケーションができることが期待される。

次の「質問力」について斉藤は「相手の話の本質を把握する要約力が基礎になる」（p. 65）とし、「相手の話の要点を押さえたうえで、相手の話がもう少し深まったり、広まったりする方向へ水を向けるの」のがよい質問であるとする。今の日本の若者にこうした質問をする力が弱いことが指摘されている。

最後の「コメント力」は本質においては「質問力」と重なる部分が多いが、質問の代わりに「何かに対する意見をまとめて発表すること」とであると定義している。そしてこれも日本人は慣れていなくて、その能力が低いとしている。

斉藤はそれぞれについて練習によってその力を付けることが可能だとしている。

「要約力」はある意味で「質問力」と「コメント力」の土台であり、「質問力」と「コメント力」は同じコインの裏表のような関係であるとも言える。それでこの3つの力をここではまとめて「コメント力」としたい。「コメント力」はその性質上いずれも時間をあまり置かないで発言する必要があるので、これに慣れていれば conversational stamina も自然に備わっていることになる。

この「コメント力」の不足は英会話の授業、あるいは実際のコミュニケーションの場合などで会話がうまく展開していかない（これも「英語がうまく話せない」と言われる現象の一形態である）ことの大きな原因であると思われる。筆者にはずっと疑問に思っていることがあった。会話に参加できない、発言ができない学生を前にしたときに、それが英語力のせいではないのではないかと感じる時が多々あったことだ。もしかして「日本語でも話すことがないから話せないのではないか」ということだ。それをずっと「話す内容がない」というふうに表現してきたが、斉藤の考え方の方が合理的だと思われる。それでなくても日本の学生の興味の幅は欧米やアジア、アフリカの学生に比べると狭く、政治、経済、文化など様々な点で持っている情報が少ない傾向が強い。そこにコメント力まで不足しているために話すことがなく議論にも参加できないことになる。

#### 4. まとめ

本論では「英語を話せるようにするトレーニング・プログラム」への第一歩として、会話のプロセスと必要であろう能力について考えてきた。これまでスピーキングに必要と考えられてきた能力（eg. 発音、語彙、文法 etc.）やもう少し広い視点でコミュニケーション能力として取り上げられてきたもの（eg. 社会的な文脈上適切な文を作る能力 etc.）以外に英語で会話をするときに重要と思われるものをまとめてみた。

まず会話をリスニングとスピーキングが交互に繰り返される双方向の有機的なプロセスと考え、コミュニケーションの制限時間内に best guess → 発話

を繰り返す性質に注目した。そして様々な要因が影響を与える「会話のスタミナ」が英語によるコミュニケーションでは重要な役割を果たすことを述べた。次に英語力以外の要因として「コメント力」を取り上げて、その英会話における重要性を主張した。

「英語が話せない（＝英語でコミュニケーションできない）」と一言で言っても、英音が聞き取れず（or 語彙がわからず or 文法がわからず or その組み合わせ）に相手のメッセージが理解できないからなのか、それとも言いたいことを英語で発話するために必要な発音、語彙、文法などの能力が不足しているからなのか、あるいはスタミナすぐになくなってしまって集中できないからなのか、それともコメント力がないからなのか、あるいはその組み合わせなのか、実に様々な要因が考えられる。その要因によって、学習者によっては必要なのは発声練習であったり、文を組み立てる（文法）練習であったり、コメント力の練習であったりするはずである。本論はそうした症状別の対処法の必要性を示すと共に、そのために必要な能力を特定する第一段階として会話に必要なのに今まであまり取り上げられてこなかったものについて論じたものである。

研究の次の段階としては、

1. 英会話に必要なすべての要因、能力を特定していき体系としてまとめる
2. 各要因、能力についてより詳しい情報を蓄積する
3. 個人別に話せない要因を特定する診断テストを作成する
4. 各要因別のトレーニング・プログラムを作成する

の4点を考えている。本来は1→4という順番で進めていくべき性質のものではあるが、英語教育の実践者としては少なくとも4（3の一部も含む）は同時並行で行う必要があると考えている。こうした研究の成果が1日でも早く「英語を実際に話せるようになる」指導に結びつくことを強く期待したい。

## 参考文献

- Campbell,R. and Wales,R. 1970 “The study of language acquisition.” In Lyons,J. (ed.)New Horizons in Linguistics. Harmondsworth: Penguin Books
- Hymes,D. 1972 On Communicative Competence. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 小室俊明. 1997 「スピーキング能力の構造と指導」『二松学舎大学国際政経論集』 5、 pp. 87-96
- \_\_\_\_\_. 1998 「スピーキング能力の育成を目指す授業」『二松学舎大学国際政経論集』 6、 pp. 157-171
- 斉藤孝. 2001 『子どもに伝えたい三つの力』 日本放送協会
- 武井昭江. (編) 2002 『英語リスニング論』 河源社
- 馬場哲夫. (編) 1997 『英語スピーキング論』 河源社